

金田一 貞澄

1. 序論

古いX I～X V世紀のロシア語の文献（聖書、聖者伝、年代記、叙事詩、戦記物語など）において、現在時制を語り（地の文）の中で多用している作品は殆んど見当たらない。例外は、『イーゴリ遠征物語』と『ザドンシチナ』である。

ギリシャ語から翻訳された福音書なども、原語では現在時制が用いられている場合でも、古代教会スラヴ語に翻訳する際には、すべて過去形に訳し直されている。Moulton(1911. 196)によれば、福音書中の現在時制による語りの使用は、『マルコ伝』151回、『マタイ伝』78回、『ルカ伝』4回、『ヨハネ伝』162回となっているが、古代教会スラヴ語訳ではそれらがすべて過去形になっている。

Потебня(1977. 194)によれば、翻訳当時、現在形の使用は話し言葉に特有の文体であって、福音書の文体としてふさわしくないと翻訳者が判断したためではないかと推測している。

では何故、『イーゴリ遠征物語』と『ザドンシチナ』には現在時制の語りが多用されているのであろうか。

Кузнецов(1949. 33)は、叙事詩の中で、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』、『ニーベルンゲンの歌』には、語りの中に現在時制はなく、一方『イーゴリ遠征物語』やセルビアの歌や『ローランの歌』には現在時制が使われている事実を挙げ、次のように説明している。

「ロシア、セルビア、フランスの叙事詩によく使われている「歴史的現在」が、ホメロスにおいて見られないのは、次のような理由によるものであろう。イリアスやオデュッセイア（特に後者）には、昔の英雄的な出来事に関する個々のばらばらの歌を1つの大きな作品にまとめ上げた1人の創作者の痕跡が窺われる。...

それらの個々の歌が作られてから、ホメロスの叙事詩となるまでの間に長い年月が経っている。それ故、語りは静かな叙事詩的な調子となり、「歴史的現在」といったような、歌い手自身が出来事に対して直接的に感情を伝えるといった表現はなくなっているのである。一方、ロシアのブイリーナやセルビアの歌は、もっと初期の段階に文字化されている。」（文中の「歴史的現在」は「語りの現在」と言い換えられる）

このように、Кузнецовは、『イーゴリ遠征物語』の語りに現在時制用法が多い

理由を、創作から文字化までの口承期間がオデュッセイアの場合に比べて短かったために、歌い手の感情を含んだ表現が残ったまま文章化されたためであろうとしている。

この指摘が全面的に正しいかどうかはよくわからないが、『イーゴリ遠征物語』に現在時制による語りが多く、その理由が、口誦文体的叙事詩であることと密接に結び付いていることは確かであろう。

一方、戦記物語である『ザドンシチナ』の語りに現在時制が多用されている理由は、恐らく『イーゴリ遠征物語』の文章・文体の影響を強く受けて、同じくブイリーナの要素を含む口誦文体的な作品になっているためであろうと思われる。

本論文では、『イーゴリ遠征物語』と『ザドンシチナ』という、現在時制の使用において著しい特徴を有する2作品を取り上げ、それらの語りにおける現在時制用法の特徴を分析し、その後一般の話し言葉による過去の語りにおける現在時制用法、およびブイリーナにおける語りの現在時制用法の、2つのタイプの時制用法との比較検討を通して、中世ロシアの2作品における現在時制用法の特質を明らかにしたいと考えている。

2. 『イーゴリ遠征物語』の語りの現在時制用法

『イーゴリ遠征物語』は、XII世紀末に創作されたと推定される叙事詩で、その口承文学の伝統を生かした様式と、修辞上の手法を駆使した叙情的な表現のみごとさから、中世ロシア叙事詩の白眉と言われる作品である。

『イーゴリ遠征物語』はまた一方で、『ザドンシチナ』と共に、現在時制を用いた語りの部分が多いことでも知られている。そこでまず、『イーゴリ遠征物語』における現在時制用法から具体的に検討してみよう。

底本としてはドミートリエフ／リハチョフ共編『古期ルーシ文学記念碑(XII)』(1980)を採用した〔注1〕。『ザドンシチナ』と同一シリーズで統一した方が、編者及び表記が共通であり、一貫した分析が可能であると判断したためである。

Обнорский(1946.158)によれば、『イーゴリ遠征物語』には、述語動詞のうち現在時制が136個、未完了過去が40個、アオリストが155個、ペルフェクトが25個、それぞれ用いられているとあるが、ここで対象とする現在時制の述語動詞は会話中の使用を含まないので、全部で61個である。以下に、出てきた順にそれらを挙げる。

т рубя т ь, с тоя т ь, ж д е т ь, к л и ч е т ь, в е л и т ь, к р ы -
ч а т ь, в е д е т ь, п а с е т ь, в ь с р о ж а т ь, з о в у т ь, б р е -
ш у т ь, м р ь к н е т ь, д р е м л е т ь, б ь ж и т ь, п р а в и т ь, п о -
в ь д а ю т ь, и д у т ь, х о т е т ь, т р е п е ш у т ь, в ь ю т ь, т у т -
н е т ь, т е к у т ь, п р и к р ы в а ю т ь, г л а г о л ю т ь, с т о и ш и,

прыщешы, гремлешы, лежать, ступаетъ, хотятъ,
летятъ, гримлютъ, трещатъ, заворочаетъ, ни -
читъ, поютъ, каютъ, стелютъ, молотятъ, кла -
дутъ, вѣютъ, слышитъ, кычетъ, плачетъ, пла -
четъ, плачетъ, идутъ, кажетъ, спитъ, бдитъ, мѣ -
ритъ, велеть, плачется, ѣздитъ, кажутъ, повѣ -
даютъ, мльвитъ, свѣтитсѧ, поютъ, вьются,
ѣдетъ.

従って、語りに現在時制が多用されているといっても、未完了過去とアオリストを含めた過去時制と比較すれば、遙かに少ない。

『イーゴリ遠征物語』における現在時制用法を眺めてまず気がつくことは、殆んどの述語動詞が、テキストの中で“持続的行為”または“状態”を表しているということである。

例を挙げてみよう。（下線は現在時制の述語動詞を示す）

<例1>

Трубы трубятъ въ Новѣградѣ, стоятъ стязи
въ Путивлѣ, Игорь ждетъ мила брата Всево -
лода. (с.372)

[訳] ノヴゴロドにラッパが響きわたり、プチヴリに旗々が立ち並び、イーゴリは愛しい
弟フセヴォロドを待ち受ける。

<例2>

Игорь къ Дону вои ведетъ. Уже бо бѣды
его пасетъ птицъ по дубию, вльци грозу
въсрожатъ по яругамъ, орли клеткомъ на
кости звѣри зовутъ, лисици брешутъ на
чръленья щиты. (с.374)

[訳] イーゴリはドンに向かって兵を進める。既にもう森の鳥どもは彼の非運を予期し、
狼どもは谷間で雷雨を予告し、鷲どもは鳴き声によって死骸に野獣を呼び寄せ、狐
どもは深紅の楯に吠えかかる。

<例3>

Солнце свѣтитсѧ на небесѣ — Игорь князь
въ Руской земли. Дѣвици поютъ на Дунаи —
вьются голоси чрезъ море до Києва. Игорь
ѣдетъ по Боричеву къ святѣй Богородици
Пирогошей. (с.386)

[訳] 太陽は空に輝き、イーゴリ侯はルーシの地に座す。乙女たちはドナウの岸で歌を歌い、歌声は海を越えてキエフまで漂い行く。イーゴリはピロゴシチャの聖なる聖母教会へとポリチョフ坂を馬で行く。

これらの例は、普通ならば、過去時制の未完了過去を用いて表現するところであるが、『イーゴリ遠征物語』ではこのように部分的に現在時制がその代用をしているのである。

この現象が、『イーゴリ遠征物語』テキストにおける、現在時制用法の著しい特徴となっている。

次に、この特徴に当て嵌まらないと思われる例について、即ち非持続的行為を表していると思われる例について以下に見てみよう。

<例4>

Солнце ему тьмою путь заступаше, ношь
стонуши ему грозюю птичь убуди, свисть
звѣринь въста, збися Дивь, кличеть врѣху
древа, велить послушати земли незнаемь...
(с. 374)

[訳] 太陽は闇によって彼の行く手を遮り、夜は雷の唸りによって鳥どもを目覚めさせた。野獣のような鳥の鳴き声が起こり、ジーヴォが羽ばたき、木の梢で叫び声を上げ、未知の国々へ耳を傾けるように呼びかける。

<例5>

Другаго дни велми рано кровавья зори
свѣтъ повѣдають, чръныя тучя съ моря
идуть, хотять прикрыти 4 солнца, а въ нихъ
трепещуть синии мльнии. (с. 374)

[訳] 翌日、極めて朝早く血のような朝焼けが夜明けを告げ、海から黒雲がやって来て、4つの太陽を覆い隠そうとする。雲の中では青い稲妻がひらめいている。

<例6>

Земля тутнетъ, рѣкы мутно текутъ, пороси
поля прикрывають, стязи глаголютъ: 〈Полов-
ци идуть〉 ; (с. 376)

[訳] 大地は唸り、川は濁って流れ、砂塵は野を覆い、旗は告げる「ポーロヴェツが攻めて来る」と。

<例7>

Ступаетъ въ златъ стремянь въ градъ Ты-
муторокань, той же звонь слыша давный ве-
ликий Ярославъ сынъ Всеволодъ, а Влади-

миръ по вся утра уши закладаше въ Черниговѣ. (с.376)

[訳] 彼がトムトロカンの町で黄金のあぶみに足を踏み入れると、その音をいにしえの大
公ヤロスラーフの子フセーヴォロドが聞き、ウラジーミルはチェルニゴフで、毎朝
耳をふさいだ。

<例8>

Игорь плъкъ заворочаетъ; жаль бо ему ми-
ла брата Всеволода. (с.376)

[訳] イーゴリは兵を呼び戻す。愛しい弟フセーヴォロドが彼には哀れに思われたのだ。

<例9>

Комонь въ полуночи Овлурь свисну за рѣ-
кою — велить князю разумѣти: князю Игорю
не быть! (с.384)

[訳] 夜中にオヴルールは川向こうの馬に口笛を吹き、イーゴリ侯はここにとどまるべき
ではないと悟るように、侯に呼びかける。

<例10>

Млъвить Гзакъ Кончакови: (Аже соколь къ
гнѣзду летить, — соколича рострѣляевѣ сво-
ими злачеными стрѣлами). (с.386)

[訳] グザークがコンチャークに言う「もし鷹が巢に飛んで行くなれば、自分達の黄金の
矢で鷹の子を射殺そう」。

<例4>では、велитьが非持続的な行為を表しているように見えるが、「命じる」
ではなく、「呼びかけている」と解釈すれば、持続ともとりうる。

<例5>では、повѣдаютьが非持続的な行為を表しているように見えるが、「告
げる」という行為が、複数の主体(зори)によって行われていることから、「夜明け
を知らせている」という状態を表しているとも考えることもできる。

<例6>では、глаголютъが「言う」という発話行為動詞であり、次に直接話
法を伴っていることから、特別に現在形が用いられたのではないかと思われる。

<例7>では、ступаетьが非持続的の行為のように見えるが、「あぶみに足を踏
み入れる」という行為を「戦いに遠征する」という行為の比喩であると考えれば、持続的
と見なすこともできる。またその後「毎朝耳をふさいだ」とある点からも、「足を踏
み入れる」行為が持続的または反復的行為であるという推測が成り立つ。

<例8>では、заворочаетъが非持続的の行為に見える。権威あるヤコブソ
ン校訂の『イーゴリ遠征物語』テキストの現代ロシア語訳でも、この箇所だけは現在形で

はなく、過去形を使って、ринулся воротить (呼び戻すことに専念した) と訳している [注2]。

<例9>では、やはり велить が問題であるが、<例4>と同様、「呼びかけている」と解釈することで持続的行為と見なすことができる。Срезневский 編『古文書に関する古期ロシア語辞典資料集』(1893)によれば、вельти は「願望や意思を表現する」とあるので、上のような解釈が可能に思われる。

<例10>では、<例6>と同様、мльвить が「言う」という発話行為動詞であり、そのために特別に現在時制が採られたと考えられる。

以上、細かい点はともかくとして、『イーゴリ遠征物語』に用いられている現在時制の述語動詞の殆んどが、“持続的行為”や“状態”を表していることがわかった。そして、それに含まれない例外は、2箇所の「発話行為動詞」と、<例8>である。

3. 『ザドンシチナ』の語りの現在時制用法

次に『ザドンシチナ』について、その現在時制用法を見てみよう。底本はやはり『古期ルーシ文学記念碑(XIV-XV世紀半ば)』(1981)を採用している [注3]。

『ザドンシチナ』は、14世紀末に書かれた戦記物語の1つであるが、一見して『イーゴリ遠征物語』との類似性は明らかであり、『イーゴリ遠征物語』の模作、焼き直しとも言われている。その結果、同時代につくられた『バツーのリャザン襲撃の物語』のように、戦いの展開を中心に淡々と語る戦記物語というよりも、豊かな叙情性を秘めた叙事詩的な語りの作品となっている。

2つの作品の類似性は、物語の展開の構成や、随所に配された独特の口承文学的なレトリック表現などに顕著にあらわれているが、現在時制の使い方まで影響を受けていると思われる箇所もある。例えば、

<例11>

На Москвѣ кони ржут, звѣнит слава по
всей земли Руской, трубы трубят на Колом-
нѣ, бубны бьют в Серпугове, стоят стязи у
Дону великого на брезѣ. (с.98)

[訳] モスクワでは馬どもがいななき、ルーシ全土に榮譽が響きわたり、コロムナにラッパが鳴り響き、セルプホフに太鼓が打ち鳴り、大いなるドン川の岸辺に旗々が立ち並ぶ。

は、『イーゴリ遠征物語』の次の箇所とそっくりである。

<例12>

《Комони ржутъ за Сулою — звенить слава въ Киевѣ》.

Трубы трубятъ въ Новѣградѣ, стоятъ стязи въ Путивлѣ, . . . (с. 372)

[訳] 「スーラの彼方に馬どもがいなき、キエフに榮譽が響きわたる」

ノヴゴロドにラッパが鳴り響き、プチヴリに旗々が立ち並ぶ。

上の2つの例文を比べてみれば、単に表現や述語動詞が似ているだけでなく、現在時制を用いたところまで一致していることがわかる。両作品における現在時制による語りの割合が、過去時制に比べて遥かに少ないことを思えば、ここでの表現における現在時制の一致は単なる偶然とはとても考えられないものである。

ただし、<例12>『イーゴリ遠征物語』では、前半の文が引用符の中に入った会話の内容となっていて、<例11>と食い違いを見せているが、これもヤコブソンの校訂テキストに拠れば、以下のようにこの部分も地の文となっていて『ザドンシチナ』と一致している

[注4]。

<例13>

Комони ржутъ за Сулою — звенить слава въ Киевѣ; трубы трубятъ въ Новѣградѣ — стоятъ стязи въ Путивлѣ; (18.)

また、『ザドンシチナ』では宴が繰り広げられている場面から物語が始まるが、これなどはブイリーナによく出てくるヴラジーミル大公の酒宴の場面を彷彿させるものである。

以上から、『ザドンシチナ』は戦記物語でありながら、『イーゴリ遠征物語』と同様の叙事詩的文体で語られており、時制用法についても互いに類似していることが予想される。

『ザドンシチナ』に用いられている現在時制の述語動詞の数は全部で50個であり、それを順に挙げると次のようになる。

сѣдять, ржут, звѣнит, трубят, бьют, стоят, звонять, стоят, выступают, трепещут, идут, воют, хотят, хотят, летают, грают, говорят, хлѣкчют, воют, брешут, хотят, хотят, сияет, повѣдает, воздают, шумит, грѣмит, пребирает, ведет, велит, поскакивает, посвѣчивает, лѣжат, кличют, грают, кличет, грѣмят, восхвалит, поскакивает, гремят, ревут, бѣжать, везут, текут, трубят, тешить, казнит, милюють, лѣжат, говорит.

これらの現在時制の述語動詞において最も目につく特徴は、『イーゴリ遠征物語』と同様、“持続的行為”または“状態”を表しているということである。例を挙げる。

<例14>

А уже бѣды их пасоша птицы крылати, под облакы летают, вороны часто грают, а галицы своею рѣчью говорят, орли хлѣкчют, а волцы грозно воют, а лисицы на кости брежут. (с.100-102)

[訳] だが既に翼のある鳥どもは彼らの非運を見て取って、雲の下を飛び回り、大ガラスどもは度々甲高く鳴き、一方小ガラスどもは自分達の言葉で鳴き交わし、鷲どもは鳴き叫び、また狼どもは恐ろしげに唸り、一方狐どもは骨に吠えかかる。

<例15>

Что шумит и что грѣмит рано пред зорями? Князь Владимиръ Андрѣевичъ полки пребирает и ведет к Великому Лону. (с.102)

[訳] 夜明け前早く、何が騒いでいるのか、何が鳴り響いているのか。あれはヴラジーミル・アンドレーヴィチ侯が兵をととのえ、大いなるドンに向かって進めているところなのだ。

<例16>

Тако бо Пересвѣт поскакивает на своем борзом конѣ, а злаченым доспѣхом посвѣчивает, а иные лѣжат посечены у Дону великого на брезѣ. (с.104)

[訳] こうしてペレスヴェートは自分の俊足の馬に乗って駆け、金を着せた武具をきらめかせるが、既に多くの者たちが大いなるドン川の岸辺に傷つき倒れている。

また、次に直接話法を導く発話行為動詞の現在時制用法も1箇所見られる。

<例17>

Тогда говорит Михайло Александровичъ, московский боярин, князю Дмитрѣю Ивановичю: «Господине князь великий Дмитрѣй Ивановичъ!...». (с.110)

[訳] その時モスクワの貴族ミハイロ・アレクサンドロヴィチがドミートリイ・イワノヴィチに言う「君主、ドミートリイ・イワノヴィチ大侯よ!...」。

その他に、非持続的行為を表していると思われる現在時制用法が1箇所ある。

<例18>

Кликнуло Диво в Руской земли, велит по-
слушати грозным землям. (с.104)

[訳] ルーシの地でジーヴォが1声鳴き叫び、恐るべき他の国々に耳を傾けるよう呼びか
ける。

しかし、この<例18>も、『イーゴリ遠征物語』の<例4><例9>の場合と同様、「命
じる」ではなく、「呼びかけている」と見なせば、持続的行為と解することもできる。

以上から、『ザドンシチナ』においても、その語りの現在時制用法に対して、『イーゴ
リ遠征物語』と同様の結果が導かれた。即ち、語りにおいて用いられている現在時制の
述語動詞は殆んど“持続的行為”または“状態”を表しており、その他「発話行為動詞」
による現在時制用法が1箇所見られた。

4. 考察

(1) 話し言葉における過去の語りの現在時制との用法比較

2つの作品について、その現在時制用法の特徴をそれぞれ大づかみではあるが取り出し
た結果、両者は極めて近い使われ方をしていることがわかった。

次に、この2作品に現れている時制用法の特徴がいかなる文体的性格を意味しているの
か考えてみよう。そのためにまず、一般の自然な話し言葉における時制用法と比較して、
これらの作品の時制用法の性格をより鮮明に浮き彫りにしてみよう。

ふつう、人が過去の体験を語る時、その中に過去時制だけでなく現在時制も用いられる
ことを観察した[注5]。例えば、その典型的な例として、生き生きした話し言葉によ
る民話の語りがある。例を見てみよう。

<例19> (現在時制の持続的行為と発話行為の例)

Вот бежит лисичка и видит: на воротах си-
дит петушок. Она ему и говорит: 〈Петушок,
петушок!...〉 (с.13)

[訳] そうしてコン狐が走って行くと、門の上に雄鶏がとまっているのが目に入った。

コン狐は雄鶏にこう言った「雄鶏さん、雄鶏さん!...」

<例20> (過去持続的の非持続的行為の例)

Волк пошел на реку, опустил хвост в про-
рубь; (с.11)

[訳] 狼は川へ出掛け、氷の穴にしっぽを垂らした。

この例はアフナーシェフ『ロシア民話集』（No1『女狐と狼』）から採ったものであるが、作品全体における現在時制の使われ方は次のようである〔注6〕。

〈表1〉 “民話『女狐と狼』の語りにおける時制用法”

過去時制	現在時制			
	完了体	不完了体		
		持続	発話	非持続
78	3	28	16	0

この表から、この民話の語りにおいて、現在時制の述語動詞の行為がすべて持続または発話行為を表していることがわかる〔注7〕。

ここでは、民話を例としてとりあげたが、一般に自然な話し言葉における体験談などにおいてもその使用特徴は変わらない。 だいたい〈表1〉と同様、現在時制の述語動詞はまず持続行為に用いられ（非持続行為には〈完・過去〉が使われる）、その他の現在時制の主な用法としては発話行為動詞が挙げられる。

このように、話し言葉における過去の出来事を語る際の現在時制用法と、先の『イーゴリ遠征物語』と『ザドンシチナ』の語りの中に用いられる現在時制用法とは、共にまず第1に持続的行為を表す点で一致した特徴を示している。しかし、両者には違いも見られる。それは、発話行為動詞の場合に、話し言葉の過去の語りであれば殆んどが現在時制で表されるところであるが、先の2作品の中では、ほんの一部の発話行為動詞だけが現在時制で用いられ（各々2回と1回）、残りは殆んど過去時制（主としてアオリスト）である点である。

もう1つの違いは、話し言葉の過去の語りの場合には、完了体・現在形が習慣的行為などの中に使われることがあるが、この2作品においてはそのような完了体・現在形の用法が全く見られない点である（完了体・現在の1人称形で、呼びかけを表す用法はあるが、その場合は未来的な意味を表している）。

このように差異も見られるが、これらの2作品における現在時制用法の特徴は、自然な話し言葉における過去の語りにかかなり近いものであることが確かめられた。

例えば、全く別のタイプの現在時制用法である、プーシキンらが用いた臨場感や緊張感を高める目的の現在時制による語りの場合も、同じく話し言葉的な文体での現在時制用法であるが、そこでは持続的行為に対してではなく、主に逐次的・非持続的行為の動詞に対して現在時制が使われている〔注8〕。従って、上の2作品の使い方とは大きく異なる。

この臨場感タイプの歴史的現在と古い文献に使われている歴史的現在との違いについては、Kiparsky(1968. 30)も次のように述べている。

「典型的な伝統的な定義によれば、現在時制を使うことによって語り手は、物語の中に

没入していき、あたかも自分が出来事の見撃者であるかのように、または聞き手に見撃者の劇的な気持ちを伝えることを望むかのように語るのである。このことは現代のヨーロッパの諸言語において見いだされる歴史的現在については、疑いもなく正しい直感であるが、これをインド・ヨーロッパの初期段階の文献に当て嵌めるのは、全く筋違いであることを以下に論じよう。」

(2) ブイリーナの語りにおける現在時制との比較

次に、ロシアの口承文学を代表するブイリーナにおける時制用法と比較してみよう。ブイリーナもロシアの民衆詩人たちによって謡い継がれた英雄叙事詩であり、先の2作品と類似の文体であることが想像される。ここでは、有名な『イリヤ・ムーロメツと盗賊ソロヴェイ』（原文で270行程）をとりあげ、同様の方法で語りの使用時制の分析を行う〔注9〕。結果は、〈表2〉に示す通りである。

〈表2〉 “『イリヤ・ムーロメツと盗賊ソロヴェイ』の語りにおける時制用法”

過去時制	現在時制			
	完了体	不完了体		
		持続	発話	非持続
79	1	14	4	0

この結果からわかることは、まず不完了体・現在形がやはり持続行為に対して用いられていることである。

Лихачев (1971.264)は、ブイリーナにおける時制用法について、次のように述べている。

「ブイリーナにおいて、行為が素早く行われるエピソードは、文法的過去時制によって伝えられ、ゆっくり行われるエピソードは、現在形によって伝えられる」

ここで彼が述べていることは、本論文で指摘しているブイリーナの語りにおける現在時制と持続行為との強い結び付きを、別の表現によって言い表したものではないかと思われる。

その他の現在時制による表現は、発話行為動詞に対して見られる。ただし発話行為動詞の場合には、不完了体・現在形(4回)よりも不完了体・過去形(16回)の方が多く用いられている。例を見てみよう。

<例21>

Больша дочка эта см^от^ри^т во окошечко
косявчато / Г^ов^ор^ит ёна да таковы слова :

〔訳〕 その1番上の娘が側柱の付いた窓から眺め／次のように言う。

<例22> (二重下線は、過去時制の述語動詞を示す)

Поглядела его друга дочь любимая, / Гово-
рила - то она да таковы слова :

〔訳〕 彼の次の娘もちょっと眺めて／次のように言った。

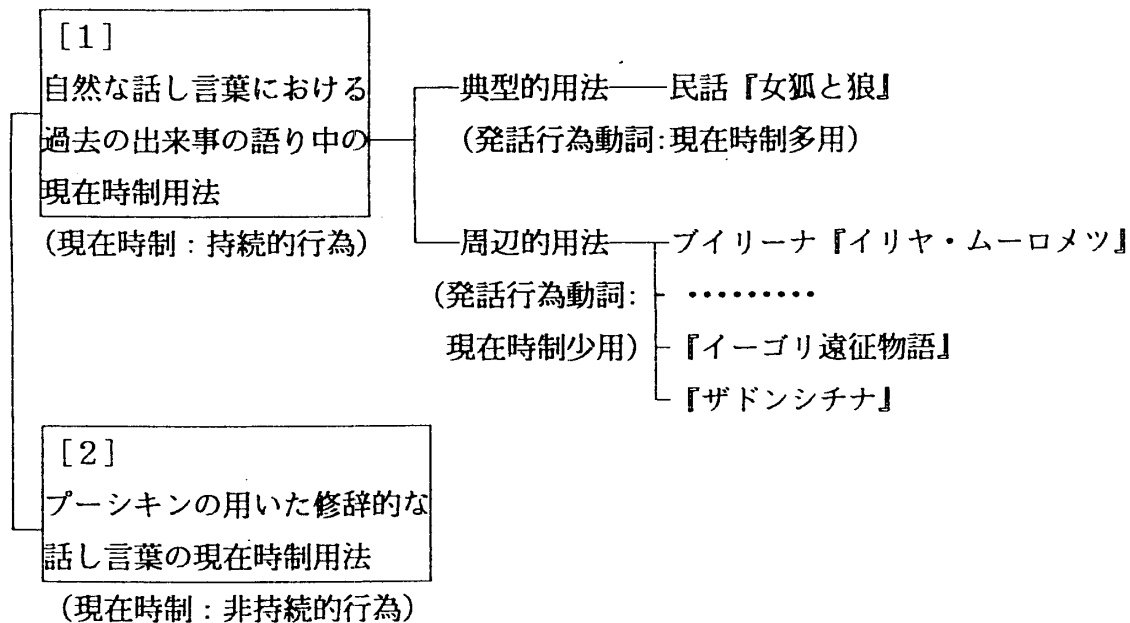
このようにブイリーナにおいては、発話行為動詞の場合、過去形(16回)でも現在形(4回)でも使われ、むしろ過去形の方が多いという結果が出ている [注10]。

以上、ブイリーナにおける現在時制の使い方を検討してきたが、結果としては、ブイリーナにおける現在時制用法が先の2作品『イーゴリ遠征物語』と『ザドンシチナ』における現在時制の用法と、自然な話し言葉の過去の語りの場合よりも更に近いことがわかる。

何故ならば、①主に持続行為に対して用いられること、②発話行為動詞の場合には過去形の方がよく用いられ、たまに現在形が用いられるからである。

以上の結果を整理し、これらの関係を図示すれば次のようになる。

〔図1〕 “『イーゴリ遠征物語』 『ザドンシチナ』の現在時制用法の位置”



結論として、『イーゴリ遠征物語』と『ザドンシチナ』の2つの作品が、中世ロシアの口誦文体の叙事詩とそれをまねた戦記物語である点で、ロシアの代表的口承文学であるブイリーナとの文体的類似が予想されるが、本論文はそれを文法論的レベルで、即ち現在時制の用法特徴の観点から裏付けたものと言える。

[注]

1. 『イーゴリ遠征物語』のテキストは、次のシリーズの校訂テキストに従っている。
Памятники литературы древней Руси. XII век,
ред. Л. А. Дмитриева, Д. С. Лихачева, М. 1980.
2. ヤコブソンの『イーゴリ遠征物語』の現代ロシア語訳は次の文献に拠っている。
Jakobson, R.: 1948, "La Geste du Prince Igor" — Annuaire de l'Institut de Philologie et Histoire Orientales et Slaves, t. VIII (Ecole Libre de Hautes Etudes à New York & Université Libre de Bruxelles)
指摘箇所は、節 (verse) 番号69である。
3. 『ザドンシチナ』のテキストは、次のシリーズの校訂テキストに従っている。
Памятники литературы древней Руси. XV - се-
редина XV век, ред. Л. А. Дмитриева, Д. С. Лихачева, М. 1981.
4. ヤコブソンの注2の校訂テキストの節番号18である。
5. 以下の2つの拙論に拠っている。
拙論『ロシア語における「歴史的現在」とその問題点』 — 《ロシア語ロシア文学研究》 No. 19, 1987 (pp. 57-60)
拙論『「体験談」におけるロシア語の時制用法』 — 《言語・文化・コミュニケーション (日吉紀要)》 No. 7, 1990 (pp. 74-104)
6. 『女狐と狼』のテキストは次のものに拠っている。
Народные русские сказки А. Н. Афанасьева
в трех томах, т. III, М. 1985. (с. 349)
7. 民話の語りにも採取方法や語り手によって様々なヴァリエントがある。すべての民話がこれと同じ時制用法に従っているわけではなく、また同じ内容の民話にも異なる時制用法を使った語りのヴァリエントがある。ただここで取り上げた民話は1つの典型を示すものと思われる。
8. プーシキンの用いた語りの現在時制用法については、次の拙論に拠っている。
拙論『プーシキンとチェーホフの散文小説における「歴史的現在」を中心とした不完了体現在形用法の比較』 — 《RUSISTIKA》, No. 4, 1987.
9. 『イリヤ・ムーロメツと盗賊ソロヴェイ』のテキストは次のものに拠っている。
Былина. (Классическая б-ка «Современника»)
М. 1986. (с. 115-121)

10. ここで分析対象として挙げたバイリーナのテキストは、バイリーナのヴァリアントの1つに過ぎず、このような時制の使い方がすべてのバイリーナに当て嵌まるというわけではないが、1つの典型的なテキストであろうと思われる。

[文 献]

- Kiparsky, P.:1968, "Tense and Mood in Indo-European Syntax" — Foundations of Language, No. 4.
- Moulton, J. H.:1911, Einleitung in die Sprache des Neuen Testaments, Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
- Кузнецов, П. С.:1949, "К вопросу о PRAESENS HISTORICUM в русском литературном языке" — Доклады и сообщения филологического факультета МГУ, вып. 8.
- Лихачев, Д. С.:1971, Поэтика древнерусской литературы, изд. 2 - е, Л.
- Обнорский, С. П.:1946, Очерки по истории русского литературного языка старшего периода, М.
- Потебня, А. А.:1977, Из записок по русской грамматике, т. IV, вып. II.: Глагол., М.
- Срезневский, И. И.:1893, Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникамъ. Пб.